3つのひかり　未来をつくる
広島市立大学
Hiroshima City University

2025年度 グローバル人材育成講演会

文化の違いは「問題」のもとか？

Les différences culturelles sont-elles sources de “problèmes”?

1960年代以降のフランスにおいて、外国人移民の子供たちをいかにフランス社会に統合させていったのだろうか。

会場：講堂大ホール

定員：500名程度

講師：アズーズ・ベガーグ氏
（作家、社会学者、フランス元機会均等推進担当特命大臣）

2025
5/23（金）
13:00-14:30

講師プロフィール：Azouz Begag氏

フランスの作家、社会学者、元機会均等推進担当特命大臣。
1957年にリヨンに生まれる。両親はアルジェリアからの移民。リヨン第二大学で経済学の博士号を取得し、フランス国立科学研究センターに所属するかたわら、リヨン中央学校で教鞭を取る。2005年から2007年まで、フランスの機会均等推進担当特命大臣を務める。主な作品に『シャアバの子供』（1986年、日本語版2021年）、『ベニ、あるいは私有の天国』（1989年）、『サラーム・ウエッサン』（2012年）、『太陽の記憶』（2019年）、主なエッセーに『浴槽の中の羊』（2007年）などがある。国家功労勲章（1996年）、レジオンドヌール勲章（2005年）受章。

アメリカ合衆国にアメリカン・ドリームが存在するのと同様、フランスにもフレンチ・ドリームなるものが存在するのだろうか。

1789年の革命以来、フランスは社会階層、性別、民族に関わりなく、あらゆる子供たちに社会の一員としての場を与えることになっており、それは全ての人々が享受できる教育を通じておこなわれる。そして、この国では特権階級出身であることではなく、個人の能力と努力が成功への鍵となるはずである。ところが、ここ半世紀以来の社会的、政治的状況を見てみると、共和制に基づいたメリトクラシーという建前と現実には大きな隔たりがあることがわかる。外国人移民の子供による驚嘆すべき個人的成功の例が存在することが否定できない一方、集団的に見ると必ずしもそう簡単ではない。そこには機能不全におちいったフランス式統合政策が原因としてあるのだろうか。

※フランス語による講演。下境真由美氏（オルレアン大学人文学部准教授）による通訳付き。

後援：公益財団法人日仏会館　公益財団法人森村豊明会
「フランスに於けるマグレブ系『移民』と文学」グループ

＊ ご参加希望の方は、左のＱＲコードからお申込みください。

３学部合同演習を履修している学生は、申し込み不要です。

お問い合わせ先　国際交流推進センター（講義棟Ｉ階 104）
TEL：082-830-1784　Email：iepc@m.hiroshima-cu.ac.jp